

阿部聡(あべ・さとし)

1962.8.10-2005.8.21

- 1989 工作舎入社。最初は企業PR ツール、会社案内などのデザインを担当。当時から独自のデザイン・ワークが好評を得た。
- 1991 『セイレムの魔術—17世紀ニューイングランドの魔女裁判』(工作舎)で、単行本デザイン・デビュー。
- 1993 工作舎退社。
独立し、デザイン事務所Leyden(ライデン)を世田谷太子堂に開く。音楽・美術・文化史・サブカルチャー関連へと活躍の場を広げる。
- 2001 デスクをcozfish(コズフィッシュ)内に移し、cozfish plus(コズフィッシュプラス)として活躍。
- 2002 cozfish正式スタッフとなる。
- 2003 2003年から2005年にかけて三つのシリーズ企画、「ミステリーランド」(講談社)、「奇想コレクション」(河出書房新社)、「ディズニー・POOH」シリーズ(竹書房)を担当。「ミステリーランド」は、「かつて子どもだったあなたと少年少女のための」を合言葉に、第一線のミステリ作家たちが書き下ろす話題企画。原稿を読み込む熱中ぶりで新境地をひらいた。最初の装丁会議では、コスト別に数案を用意。が、新しいなつかしさに満ちた見事な造本案ゆえ、関係者一同、第一案に賛同した。海外異色作家の短編アンソロジーシリーズ「奇想コレクション」(河出書房新社)もまた、装画、本文組、造本すべてに緻密かつ斬新な発想を活かすトータルデザインで、評判を呼ぶ。「ディズニー・POOH」シリーズ(竹書房)は、秀逸な翻訳文に向けての助言にはじまり、美しい本文組、おとなが持っているもうれしい装丁で、他の追随を許さないものとなった。
- 2004 第38回造本装幀コンクール展で文部科学大臣賞受賞。受賞作:講談社ミステリーランドシリーズ「くらのかみ」／「子どもの王様」 ブックデザイン:阿部聡 with 祖父江慎
- 2005 事務所を下北沢に移し、再びフリーランスとして活動開始。



阿部さんのこと。 関口和之 (サザンオールスターズ)

阿部さんと初めて会ったのは15年前。「ウクレレ快樂主義」という本を作ろうとしていた時でした。ブックデザインを頼みに訪れた工作舎で「僕、やりたいです」と手を挙げてくれたのが阿部さんでした。以来ウクレレの本を3冊、ディベアの本1冊と一緒に作ることにするのですが、常に繊細な目配りと大きな確信を持って仕事する姿が印象的で、専門的なことをよく知らない僕にさえ、この人はすごいデザイナーになる、と感じさせるものを当初から持っていました。最初の本がきっかけで独立した阿部さんとは家が近かったこともあって、つまらない頼み事をしたりされたりする仲となりました。困った事があると聞き取れないような小さな声で「ちょっと相談があるんですけど……」と電話をかけてくる彼でしたが、ピカピカのロードスターをうちに乗った時の自慢げな顔を忘れる事ができません。「ハワイ行きたいんですよ」と言うので「今度はハワイへ行けるような企画にしようね」と話したのもよく覚えています。酔っぼらうとニヤニヤ笑いながら音楽に乗ってクネクネする姿も可愛しかった。仕事場におじゃまするたび新しい作品や進行中の仕事を見せてもらうのが楽しみで、将来作れるかもしれない新しい本に夢を膨らましたものでした。

手にして* 菊地信義 (装幀家)

四六判の天地を少し短くした判型、ホール紙の筒入り。筒に穿った穴から表紙の少年の画がこちらを見つめている。(中略)筒の画は緑一色、穴から見える画はアート紙にカラー印刷。それに金紙シール。三つの異なる質感が興を呼んだ。手にすると、筒の内に見える本の背は鮮やかな緑の布。手の内で四つのマチエールがあやなすえもいわれぬ味おいにくくりました。(中略)表紙、筒の表裏に重層的に構成された文字や画。造本から本文のデザインすべてが、子供たちが馴染んでいる電子メディアと、その画像の有り様を、本というメディアへいかに移すか、その思案の姿とみた。上質なエンターテインメントの容器として、本は十全にデザインされたといっている。



約束されていた幸せな時間が失われてしまふのは実につまらない。なんたって君は僕よりもずっと若くてホントは僕を見送ってくれる中の大切な一人じゃなかったのか? なんてことを空に向かって恨みがましくつぶやいても、きっと阿部さんのことだから「すみませんね」とニヤニヤしてるんだろな。冥福を祈る。



ユーノス・ロードスター 宇山日出臣 (元・「ミステリーランド」担当編集者)

ユーノス・ロードスターという軽量スポーツカーが誕生したのは平成元年のことです。バブル崩壊の直前に発売された、そのコンセプトが世界で認められ、ベンツ、BMW、ホンダがその後を追ったほどの名車です。2人乗りのオープンカーでトランクはスーパーのビニール袋をひとつ入れたらいっぱいという、走りに徹した日常生活には不向き olmayan 車です。阿部さんとは「かつて子どもだったあなたと少年少女のためのミステリーランド」シリーズの直接担当者として一緒にしたのですが、互いにユーノス・ロードスターのオーナーであることが判明した時点で、以降、よけいな言葉は不要となりました。車の色は、と聞いたところ首都高でガードレールに激突大破のご返事。その強運に感嘆したのですが、紅葉のころ宇山の八ヶ岳の山荘にご招待した時のことです。朝食の後、車のキーをお渡しし、たのしんでください、とおくりしたのはいいのですが陽もとっぶり暮れ、安心となく不安になり始めたころによりやくご帰還。ほっとして、楽しかったでしょうとときと第一声「いやあ、怖かった」。かくのごとく、ほどほどのアクセル加減というものを知らないまま彼方へジャンプされてしまったようです。ちょうど宇山の定年退職時期と重なり、一段落したときに知らされただけに阿部さんの不在はいまだに信じられません。ひとあし先に彼岸へと旅立ったロードスターと合流。ひゃあーとか悲鳴を上げながら、フルアクセルで飛ばしておられることでしょう。「ミステリーランド」はそのブックデザインで文部科学大臣賞を受賞しました。



なんてたって、 本文組み 設計も すごいんです。 祖父江 慎 (グラフィックデザイナー)

ほくにとっての阿部ひょんデザインが一番の魅力って、やっぱり本文の文字組み設計です。組み設計デザインの魅力は、わかりにくいものかもしれませんが、読み味わうちに「なるほど〜」な世界なんです。「ディズニー・クラシック」のシリーズは、清潔感のある、力強くもやさしい、伝統的な設計です。美しいのに、いまはそうそうお目にかかれなタイプです。文庫サイズの本って一般的に、本文組みはながいしろにされがちでしょう。ここまで極めたものに出会うことは、まずありません。読んでいると逆に、まるで組まれた文字たちが本の大きさを決めたかのように思ったりしてしまいます。「ホクのアンパン分分泌」にいたっては、8種類の組みフォーマットをベースに文字たちがエネルギーに舞ってます。しかもフルDTP。そして極端に時間がなかったんですよ。ふつうなら素直な選ぶところなのに……神業みたいな、あきれてしまうほどのパワーです。これはもう事件かも、つくりのデザイン。阿部ひょんは本当に本が好きで、原稿がで上がると暇に読み終えて、「ここが面白かった、ここはどうかと思うけど……」などと嬉しそうに話していました。編集者のセンスも、バツグンでしたよ。組み設計への心くほりのみに限らず、印刷時には寝不足のままだでも必ず立ち会い、すべてがパーフェクトな仕上がりでした。もう、脱帽の連続なんです。机の脇の書棚に並ぶ本のレイアウトまでも完璧で、よく「もっと、いいかげんでも大丈夫だよ〜」なんて話したよ。コズフィッシュを離れ、また個人オフィスから出発するとき、「これからはラフなデザインも極めたいと思うんですよ」ってはりきっていたのに、オフィス名を決める前にいなくなってしまって、すごく残念です。阿部ひょんの不在は、ブックデザイン界にとって、かなりの痛手です。もう、そんなにかんばらなくてもいいんだひょん、阿部ひょん。

仕事

ABE,Satoshi
Design
Works



阿部聡さんの

*連載「装丁雑記」より抜粋(角川書店発行「本の旅人」2004年5・6月号所収)。「ミステリーランド」シリーズの「くらのかみ」(小野不由美著)について書かれたエッセイです。

